

## 教育の落とし穴

～1 学期終業によせて～

2022・7・20 重枝 一郎

社会の急速な変化は、生徒たちの性質的な部分も変化させている。デジタルネイティブ世代ということもあり、私自身も自分の経験則だけでは、うまくいかないことが多々ある。そして、それはどんどん増えていくような怖さもある。

昨年度より「一人一台タブレット授業」を準備してきた。本年度の授業は、多くの先生が ICT 活用授業を試みている。新たな授業構成になる分、大変なこともたくさんあったと思う。でも、やったことで見えたこともたくさんあったのではないだろうか。これからも、「次はもっといい失敗をする」くらいのマインドで生徒とともに授業をつくれればいいと思う。

**先生方、本当に 1 学期間お疲れさまでした。ありがとうございました。**

さて、「教育の落とし穴」について話す。

まずは「一般化のワナ」についてである。

私たちは全員、学校教育を受けた経験をもっている。それによって、自分の考えや言いたいことをそれぞれの経験則としてもちやすい。そうすると、自分の限られた経験を他の人にも当てはめてしまうという「一般化のワナ」にはまってしまう。各々がもっている経験則は、本当に誰もが納得できるような考えなのだろうか？「何のための学校」「学校の先生と塾の先生の違い」「運動部の指導方法」「授業方法」・・・一般化のワナに引っかからないように常に心掛けたい。

次に、「問い方のマジック」の話をする。

そもそも一般化できないのに一般化してしまっているという話である。二者択一、どちらかが正しいと思ってしまうことである。「生徒をほめて伸ばすか、叱って伸ばすか」「ゆとりがいいのか、詰込みがいいのか」「できる生徒を伸ばすか、できない生徒を伸ばすか」「厳しく罰すか、反省の機会を与えるか」・・・このような問いをどちらか選択して、最適解を見つけようとしてもできるわけがなく、いつも納得解をつくることになる。これを一般化しようとする、柔軟な発想を奪ってしまうことになり、変化についていくことはできない。「問い方のマジック」に陥る思考のクセをつけてしまわないようにしなくてはならない。そして、時に、二者択一でなく、第3のアイデアが生まれるのである。いつも言う「白黒思考をしない」ということである。

最後に、「即効性のワガママ」について話す。

私たちは、何か生徒のために取り組んだとき、そのときの感触がよかったら、生徒の早い変容を期待してしまう。ところが、自分の期待通りとはならないことが多い。「自分はこれだけしてやったのに」「自分はこれだけ話し込んだのに」・・・教師は即効性を求める生き物であることには違いない。一人の生徒の一生のうちの一部しか関わらないのに。現実的に即効性のある取組もある。しかし、ない取組もある。当然である。即効性がない場合でも必ず、あるタイミングでその取組は効果的に作用することがある。一番いけないのは、それを知らずに、「どうでもいい」という気持ちになることである。この「どうでもいい」というのはニヒリズムという。今の時代、このニヒリズムが蔓延しているといわれる。私たちも生徒もこのニヒリズムの克服の仕方を常に考えていることが柔軟さを身に付ける。正解があると思うからニヒリズムに陥る。私たちは学び続ける上で、自分なりの正解の見つけ方を同時に学んでいかななくてはならない。

夏課外・学習会、部活動など大変だとは思いますが、少しでも先生方が休めることを祈っています。